

生き生きと取り組む国語科学習指導の様々な工夫

— 高校における二年間の取り組みを通して —

黒 瀬 直 美

一、はじめに

大学を卒業後、すぐに県立の福山商業高校で教鞭をとることになった。新任教師として期待と不安に胸をふくらませて教壇に立った。

高度経済成長期には、かなりの優秀な生徒を社会に送り出していた福山商業高校も、高度経済成長の時代が過ぎ、「学歴社会」の時代となってからは、もっぱら総合選抜高校の受け皿的役割を担うようになっていった。特にここ二、三年、生徒数激減を見込んだ私立高校の生き残りをかけての進学保障への取り組みが進む中、ますますその様相を濃くしている。

そういった状況の中で、学力によって切り捨てられた生徒たちに、なんとか「学ぶ喜び」「学ぶ楽しさ」を味わわせ、生き生きと授業に取り組またい、と考えた私の、二年間の取り組み（対象・高校一年生）を紹介したい。

二、生徒の実態

教師になるまで、多くの教師がそうであるように、私もいわゆる「進学校」で学んできた。そのため、自分の受けてきた授業というものは、生徒たちには全く通用しないだろうと考え、心して授業に臨んだ。

しかし、実際に授業をしてみると、想像を上回るほどのものがあつた。ノートもえんぴつも持つて来ないような学習意欲のなさ、授業に対する否定的態度、教師に対する反抗的態度。私はただただ茫然自失するばかりであつた。

導入の工夫といつても、私の話には全く耳を傾けず、教室のあちこちで騒いでいる。いつ授業が始まったのかも生徒にはわからないようで、ふと我に返つて「今、何しようるん？」と私に聞いたりする。もちろん、授業中教室内や廊下をウロウロする生徒もいる。板書計画を考えて行つても、ノートもえんぴつも持つて来ない生徒がいるので、学習が継続できず、ますます学習意欲がなくなっていく。つ

まり、全く授業が成り立たないのである。私は大きな挫折感を味わっていた。

しかし、生徒たちがなぜそのような態度をとるのか、その背景を考えてみると、わからないでもなかった。中学校三年生の時に、学力によって進路先を決められ、「ここしかおまえは行けない。」と教師によってレッテルを貼られ、劣等感を抱いたまま、傷ついたままここにたどりついた生徒たち。生徒たちがいちばん自らを發揮できない授業は、本当に嫌なものであるに違いないし、教師は自分たちを学力で判断する人物にしか見えないのである。彼らこそ挫折感を抱いて学校に通っているのだと感じたとき、生徒たちもつと前向きに、誇りを持って学校生活を送るようになりたくないだろうか、という気持ちになった。そこで、学校生活の大部分を仲間と共に過ごす「授業」の場を生き生きと充実させることが第一なのではないかと考えた。

学校柄、生活指導等に大幅な時間をとられるという制約もあったが、今度こそ、今までの自分の「授業観」を全て捨てて、生徒が興味を持って生き生きと取り組むことができる授業を工夫して創っていかうと決意した。

三、一年めの取り組み

(一) ノート学習からプリント学習へ

生徒たちはノートを持って来なかったり、他教科と兼用

したりして、ノート学習が継続しにくい状況にある。また、白紙の状態から自分のノートを作るという力に乏しい。さらに、ノートを「書く」という作業に時間をとられすぎて、授業にリズムがでにくい。

そこで思い切って、国語科の先輩の先生がすでに実践されていたプリント学習に切り替えることにした。ノートは全く使わず、教師が学習の手引きを書いた手作りのプリントを用いるのである。プリント学習をやってみて、次のような効果があった。

①プリントに何をすればよいのかが書かれているため、目標が明確化される。

②プリントを一枚仕上げで提出したという達成感が味わえる。

③ある程度の書き込みがしてあるため、生徒が書き込みする量が少なくなり、全員の書くスピードがそりやすい。授業展開にリズムができる。

④学習が継続しにくい生徒（よく授業をさぼる子）にも比較的取り組みやすい。

何よりも、このプリントを配ると、生徒が一瞬見入るのど、「導入」としての効果は十分である。プリントには、教師が説明する部分、生徒に発問し、答を書かせる部分、生徒自身が考えて書く部分を必ず入れるようにした。プリントの内容等については、参考資料として、論文の最後で紹介しておく。

(二) 評価

生徒たちの中には、授業は出席さえしていればいい、プリントは適当に書いておいて、テストで点を取れば何とかなるという生徒もいるが、一方、授業中真面目に取り組んでいてもテストの点は思わしくない生徒もいる。テスト重視の評価では、ひとりひとりを十分に評価しているとは言えないと思い、評価の方法を思い切つてプリント重視型に変更することにした。

①プリントを毎時間提出させ、点検する。一時間一時間、どれだけ深く思考しているかを重視し、自分で考えて書く部分をおろそかにしていかないか、チェックする。

②まとまった量の作文には必ず一言添える。なるべく励ましの言葉を書き添えた。次回も書く意欲が湧くようにと考へてのことである。

③ふつうのプリント提出の際には、判を押すことにした。一日に百八十人分を見なければならぬこともあるので、私自身が続けやすいものに、そして生徒にとつて面白いものに、と考へて次のような判を用いた。



「小学生みたい。」と皮肉を言う生徒もいたが、プ

プリントが返ってくる際に「やったあ!。わしはホームランじゃ。」「え? がんばれ! になったるけど、これじゃーいけんのか?」と言つたりして、かなり真剣に評価を受け止めている生徒が多い。「次こそはホームランを」と次第に意気込んでくる生徒もいる。

(三) 一年めの反省

一年めは生徒の実態をつかみにくかつたということもあつて、どうしても行き当たりばつたり、出たところ勝負的なものになつてしまつた。生徒も「バラバラして何をやっていいのかわからん」という反応を示す場合もあつた。しかし、一つの主題をじっくり長期にわたつて思考していく教材は、継続的な思考が不得意な生徒には不向きであるし、また季節や行事によつて大きく左右される生徒たちは、その時その時に応じたタイムリーな教材の方が興味を持つて取り組むことができる。

以上のようなことから、生徒たちには、一つの教科書に沿つて展開していくという方法をとらず、現代文、古文、漢文、言語事項の指導をその時の状況に即して、効果的に編成していく方法が適していると考へた。また、教材は、教科書や他の教科書から平易で面白そうな教材を選出し、それに加えて投げ入れ教材を多用することにした。手をかえ、品をかえ、様々な工夫を凝らして、国語の授業は何か知らないけれど新しいもの、面白いものが学べる、といつ

たものにししたいと考えた。

初めの一年は混沌としてまとまりのない、泳いでも泳いでも前に進まないようなもどかしい一年だったが、新たな指針を得られたということは大きかった。

次に二年めの取り組みについて紹介したい。

四、二年めの取り組み

(一) マンガを取り入れた指導

生徒たちは本よりもマンガをよく読む。マンガは視覚に訴え、一度に多くの情報を伝えることができる。この利点を生かして、部分的に授業に取り入れれば、授業にメリハリができるし、生徒の興味をひくこともできる。ここではマンガを用いた教材を紹介してみたい。

ア、「羅生門」の場合

一般に文学作品の場合、生徒ひとりひとりの想像力を育てる、あるいはイメージを大切にするため、絵的なもの、特にマンガ化することはタブーとされる傾向がある。

『羅生門』という作品は、昔から高い評価を得ている作品で、多くの教科書にも採り入れられている。一年めには、このように長く奥深い作品は敬遠し続けてきた。二年めになって、一作品ぐらいいは生徒にもこのような作品を体験させたいと考えた。しかし、語句の難しさ、時代背景の説明

の困難さに、やはりためらいを感じずにはいられなかった。

そこで思い切って「マンガ化」することで取り組みやすくさせようと決めた。そして指導目標を次の三点に絞った。

① だいたいの話の筋を理解させる。

② 全体に流れる暗澹とした雰囲気を感じ取らせる。

③ 盗みをするまでの下人の心理を整理させる。

指導計画は次の通りである。

第一時 時代背景の説明。教師による通読のあと、感想を書かせる。

第二時 プリントに沿って教科書を見ながら空欄を埋め

第三時 させる。その後、答え合わせ。(マンガ入りプ

第四時 リント)

第五時 心理の変化を整理させる。

第六時 感想を書かせる。

最初の通読の時、「この時間だけはみんな集中して読んでいこう。」と力説したため、みんな私の迫力に押されてか、この時はがんばってくれた。「よーわからん。」「気持ちわるい。」「なに、これ。」と消化不良を起こしていた。

第二時に入ると生徒はマンガに興味を持ち、セリフ入れにたいへん熱中していた。マンガに色をつけたり、もつと暗いイメージになるようにえんぴつで手を加えたりする生徒もいた。話の筋を教科書を読みながら穴埋めしていく作業にもよく集中していた。心理変化を表で整理する作業も、三分の一の生徒を個別に指導しただけで、あとの生徒は苦

心しながら自分の表を作っていた。

ただ、最後の感想で主題に迫ることを書いていた生徒は、クラスに二、三人ぐらいいしかなかった。もうひと工夫の必要を感じた。

イ、「徒然草」の場合

古文は短くてまとまりのある作品が、比較的多く教科書に採り入れられている。生徒にとっては取り組みやすい分野ではあるが、文語文法の点では動詞の活用理解だけで十時間以上費やしてもまだ足りないという実態なので、文法にはこだわらないようにした。そこで補助訳付きのプリントの原文から各人が全文訳の作業を行い、なんとか全文訳したぞという達成感を味わわせ、教材にひきつけさせてから、内容の読み取りに入った。内容の読み取りに際しては、部分的にマンガを添え、原文を自分なりにアレンジした自分流訳のセリフを入れさせたりして、内容をより楽しく理解できるように工夫した。セリフ入れは生き生きと楽しんでやっていった。

徒然草では「公世の二位の兄に」(第45段)「心なしと見ゆる者も」(第42段)にマンガを取り入れた。

ウ、「朝三暮四」の場合

漢文入門期によく用いられる教材である。読み方をくり返シテストした後、内容を分析し、「狙公の作戦を見抜こ

う」と題して、四コママンガを書かせた。

マンガを書くことが下手な生徒には丸と線だけの単純な絵で良いから、その分セリフを工夫して書くように指導した。生徒は友達を見て、キヤーキヤー言い合いながらも楽しそうに書いていた。マンガにすることで初めて内容をつかむ生徒もいた。

(二) 主題単元「未来を考える」の指導

ア、動機

一年め、いきあたりばつたりの単発的な授業に終始していたことを反省し、何とか一つのテーマを深く掘り下げていくような授業をしたいと考えた。

さて、私は二年間、一年生の最初の教材に星新一の『服を着たゾウ』を選んでいた。この教材は生徒に好評で、「面白い」という感想が必ず返ってくる。文章も平易で量も短め、コンパクトにまとまっているが、それでいて内容もある。さらにSF仕立てで、奇抜なところが生徒を引きつける。まさしく生徒にうってつけの作品だと思い、星新一の文庫本を買い、この中に何か使えるものはないだろうかと思ひ始めた。

そうこうしているうち、星新一の作品には、「文明化した社会の持つ落とし穴」を扱った作品が多いということがわかった。さらに、当時新聞紙上を賑わせていた「フロンガス」「地球温暖化」の問題とを組み合わせて、生徒に

「未来を考える」というテーマを与えてみようと思ひ立つた。

イ、展開と指導目標

第一時 「にぎやかな未来」(筒井康隆)を通読し、初

読の感想を書かせる。

第二時 「にぎやかな未来」に描かれている未来社会の

様子をまとめさせる。

第三時 「おれ」の心理状況をまとめ、小説の主題につ

いて考えさせる。

第四時 「にぎやかな未来」の主題をまとめさせる。

『ゆきとどいた生活』(星新一)を通読。

第五時 「にぎやかな未来」と『ゆきとどいた生活』に

共通している主題について考えさせる。

第六時 『生活維持省』(星新一)を読んで、感想文を

書かせる。

第七時 生活維持省の仕事内容と社会の状況について読

みとらせる。

第八時 「フロンガス」「暖まる地球」という二つの文

章を読み、内容を理解させる。「原子力発電」

について、教師の話聞きとりながらメモを

とらせる。

第九時 「未来を考える」という題で作文を書かせる。

(千字以上)

こちらとしては、「にぎやかな未来」では経済成長の果

てにCM洪水社会がやって来て、人間の静寂が奪われていく人間疎外の状況、『ゆきとどいた生活』では、身の回りのこと全てが機械化してしまい、人間が死んでしまっても人間が生きているかのように身じたくができていくために、しばらくの間主人公の死にまわりの人間が気付かないという、これもまた人間疎外の状況、『生活維持省』では人口増加によってひきおこされる世界的混乱(戦争)を避けるために、計画的に人間を殺していく社会の是非を問ひ、人口増加という未来の問題にそれぞれ目を向けさせた。

そして、今までの問題が単に虚構上のものだったのに対し、現実を見つめさせる意味で「フロンガス」と「地球温暖化」の問題、チェルノブイリ事故に関連した原子力発電の問題に触れ、人間が便利な生活を求めていく一方で、環境破壊が進んでいる状況をとらえさせた。最後にまとめとして「未来を考える」という作文を千字以上で書かせた。

ウ、生徒の反応と反省

長くひっぱりすぎたのか、生徒は多少息切れしているようであった。作文を書かせる時、いつものように「えーまた書くん」「いやよー」とひとしきり文句を言ったあととは落ち着いて書いていた。

単元全体を見通して、学習したことをまとめて書いた作品はなく、大部分はフロンガスや原子力発電の問題について書いたものだった。「自分たちは便利になったけど、こ

れからの地球の未来を考えて、スプレーを使うことはやめよう。」とか「原子力がこんなにこわいなんて知らなかった。原子力発電はやめてほしい。」等の作文ばかりであった。内容的にもっと深く濃いものを求めていたが、(現在の社会に見られる人間疎外の状況の分析や、未来における自分の生き方、未来における自分の役割について等)そういう内容を引き出せなかったのが残念だった。もう少し量を減らして、ていねいに詳しくやれば良かったのではないかと反省している。

ともかく、『生活維持省』を読んで次第に教室が静まっていくな様子、私の原子力発電の話を全員真剣な表情で聞いていた様子は大変印象的だった。作品そのものの魅力によって生徒がこんなにも引きつけられるのだ、そして何よりも生徒たちにとって身近でありながら知らない事柄を、淡々と語ることがこんなにも生徒にとって重味を持つのだと、まさしく肌で感じる事ができた単元であった。

(三) 心理ゲーム

五十分間の授業は生徒にとつては長すぎるようで、四十分も過ぎるともう耐えられないのか、席を立ててウロウロしはじめた。また、同じ教材が四時間目ともなると、多少ウンザリ顔となる。少し早めに打ち切つてやりたい、またここで一息リフレッシュしたいという時に、何をすれば良いだろうかと考えていた。そこである日、「心理ゲーム」

をやつてみた。

- ①目の前に森と草原が見えます。あなたはどちらに行きますか。(森：ネクラ・草原：ネアカ)
- ②森あるいは草原を歩いていると動物に出会いました。どんな動物ですか。(本当の自分の姿)
- ③さらに進むと、目の前に壁が立ちはだかっています。どれぐらいの高さですか。(自分のプライドの高さ)
- ④さらに進むと湖がありました。その湖は広くて向こう岸が見えませんか。向こう岸に行くのにどうしますか。(人生観・生き方)
- ⑤湖の向こう岸にいととテーブルがありました。いすは何脚だと思えますか。(将来の家族の人数)
- ⑥テーブルの上にはコップが置いてあり、水が入っています。どれぐらい水が入っていますか。(現在の満足度)
- ⑦さらに進むと、家が見えてきました。どんな家ですか。(将来自分が住む家)
- ⑧その家にはどんな人が住んでいますか。(自分の守護霊)
- ⑨家の中のテーブルの上をろうそくがともっています。ろうそくは何本だと思えますか。(浮気する相手の数)

解答をしていく時が大爆笑となる。「えーっ、私ブタ?」

「オレは豪邸に住むんじゃ。」などと生徒は口々に言い合う。この時ばかりは教室が完全に一つのこと集中している。これはしめたと思ひ、色々なゲームを探してきては、ころあいを見計らつてやつていく。すると、「先生、面白いけんやつてくれ。」「次はいつするんか。」と期待して待っている。「じゃあ、心理ゲームやりましょう。」と言うと、それまでえんぴつも持たずにぼーつとしていた生徒が急にそいそとえんぴつとメモ用紙を探していたりする。

この心理ゲームは国語の授業とは全く関係ないが、「この先生は何か面白いことをやる」という意識を生徒に与えるし、それに何よりいいコミュニケーションになり、楽しい雰囲気ができる。これも一つの工夫ではないだろうか。

五、おわりに

授業が成り立ちにくい場をどうしたら良い方向に持つていくことができるか、どうしたら生徒を生き生きと授業に取り組ませることができるか、ということを考えて二年間プリント作りに励んできた。一年めは中途半端だったプリント学習も、二年めからは最初からファイルを購入させ、毎回必ず提出、判を押し返却し、ファイルにプリントを綴じていくよう指導して、プリント学習が定着するようにした。

最初は今まで受けてきた授業のやり方との違いにとまど

う生徒や、「またプリントかあー」とめんどうがる生徒もいたが、続けていくうちに、プリントを配布するとすぐ「ん？今日は何だろう？」という表情でプリントを興味深く見るようになっていった。また、毎回毎回ファイルに一枚一枚綴じていくと百枚を超えるようになる。それを自分で作った本のように、うれしそうに一枚一枚めくっている生徒もいる。授業中、わからなくなると前のプリントをめくって探している生徒もいる。学年末の授業の感想も、「毎回プリントプリントで書くことばかりでめんどうくさかったけれど、一年間たまつた大量のプリントを見てみるとうれしくなった。」とか、「僕はいつもプリントが楽しみでした。サボつたりして赤字をつけられたりしたけど面白かった。」というようにおおむね好評だった。多くの生徒にプリント学習が受け入れられたのだろう。

だからと言って、プリント学習という形だけでは生徒は授業に参加するようにはならない。最初のうちは騒がしいし、少しでも面白くなかったり、中だるみになったりすると、それこそ收拾がつかないほど騒ぎ始める。こちらも何とか集中させようと叱りとばしたこともある。そういうことを一年間やつていくうち、だんだんと、少しずつ授業に集中していったのである。

ただ毎日プリントを作つてきて思ったことがある。プリントに沿つてやればできるようにするということは、生徒の自由な考え方をプリントにはまらない部分を除外させて、

一つの決まったレールの上に乗せていることになりはしないだろうか、自分のノートをとることも大切なのではないだろうか、またプリント提出ということではばりつけ、管理しすぎているのではないだろうか、ということだった。しかしそのたび「今はこれしかない。」という気持ちでその心を打ち消してきた。

まだまだ経験も浅く、力量不足の私には難しいかもしれないが、思い切つてある程度生徒が遊ぶことは覚悟して、グループ学習や読書の時間等、自由な学習の場があつても良かったのではないかと思う。また、授業中の説明、発問などの教師の「話す」部分を大幅にプリントに頼るため、私自身「話す」部分での成長があまり見られなかったのは……と思つている。

今の勤務が定時制ということで、学力的にはさらに遅れた生徒と共に勉強している。以前よりもっと一人一人に学習が継続しにくい状況ではあるが、さらにプリント学習を充実させたい。

一年めは授業に取り組まない生徒をよく叱つていたし、よくぶつかつていた。しかし生徒たちの心に痛みにふれていくうち、なんとかしてやりたいと思つた。授業に参加しない生徒に声をかけ、授業中全く関係のないロツクの話や性的な話を大声で始めて授業の流れを止め、クラス中の生徒の注目を集めてしまう生徒の話に乗りかかつて漫才をやりながら、また机間巡視を毎回每行つて雑談しながら、

一人一人を見ているんだよ、という気持ちで授業を行つてきた。二年めは反省も多少あるが、いくぶんか生徒と心の通い合う授業ができたと思う。

そして生徒たちのおかげで、自分にはなかつたもの、自分には見えなかつたものが見え、自分自身がより豊かになつていった二年だった。

(広島県立廿日市高等学校教諭)

② 国語工へ服を着たソウへ

一書を出し

三 状況設定

① 場所

② 時刻

③ 人物

④ 人物

三 催眠術にうて

② ソウの心情

六 対決その二へソウの警官へ

① 「しかし、大名人間な...」の...に
省略されてる言葉は何か。

② 警官が答へてしまったのは何故か。

一平 組 為(氏名)

② 四「東京おちこにうて
① 品詞名! : :
② 意味味。
・
・
・

四「東京おちこにうて

① 洋服屋の主人へソウの洋服店の主人へ

② 洋服屋の主人の心情変化

五 対決その一へソウの洋服店の主人へ

七 対決その三へソウの至能ガロへ

① 至能警官は本意か(たり)か。

② 至能ソウは拒絶(は)か。

③ 警官が至能に身やま(り)たのは何故か。

④ 「後してやま(り)なう」と言ったのは至能か。

国語工《授然亭》④

人物論②

心はしと見ゆる有り、おま言は、いんもなり。
 少志教の坊しけならが、おたへ、向ふ以下、「脚
 子は坊はすけ」と問はしに、「一人も持てけり、
 と茶へいけり」といふは、いれ知り給ふ下、はし。
 情を之にけり、いれ給ふ人にて、いれ給ふ子
 ゆえに、おま言は、いんもなり。いれ給ふ子
 けり、おま言は、いんもなり。いれ給ふ子
 けり、おま言は、いんもなり。いれ給ふ子

- 誂方
 ① 忘妻
 ② 柳子
 ③ 持子
 ④ 脚心
 ⑤ 志

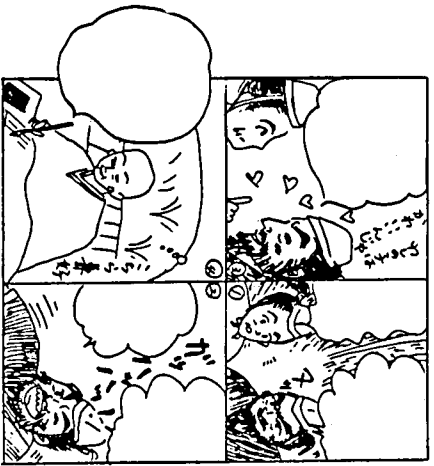
語句意味

- ① 心なし…
 ② 志氣を忘るゝけり…
 ③ おたへ…
 ④ 坊子…
 ⑤ や…
 ⑥ おま言はれ…
 ⑦ 情を柳心…
 ⑧ けり…
 ⑨ けり…
 ⑩ 志氣を忘るゝけり…
 ⑪ 志氣を忘るゝけり…
 ⑫ 志氣を忘るゝけり…
 ⑬ 志氣を忘るゝけり…
 ⑭ 志氣を忘るゝけり…
 ⑮ 志氣を忘るゝけり…

登場人物…

- ① 志氣を忘るゝけり…
 ② 志氣を忘るゝけり…
 ③ 志氣を忘るゝけり…
 ④ 志氣を忘るゝけり…
 ⑤ 志氣を忘るゝけり…
 ⑥ 志氣を忘るゝけり…
 ⑦ 志氣を忘るゝけり…
 ⑧ 志氣を忘るゝけり…
 ⑨ 志氣を忘るゝけり…
 ⑩ 志氣を忘るゝけり…
 ⑪ 志氣を忘るゝけり…
 ⑫ 志氣を忘るゝけり…
 ⑬ 志氣を忘るゝけり…
 ⑭ 志氣を忘るゝけり…
 ⑮ 志氣を忘るゝけり…

図説



現代語訳

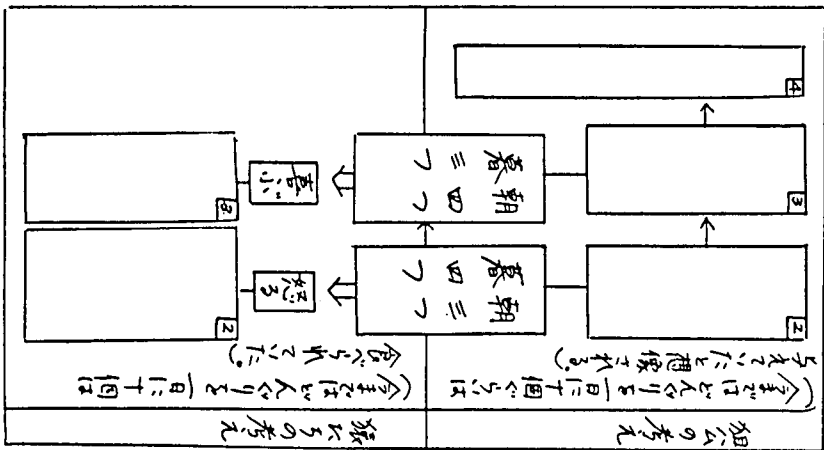
少の志氣を忘るゝけり…

番代名

()

漢文（政事成語） 一年 租 者代五（ ）

租公の作就を見抜...



朝三暮四を四の漫画にしてみよ。

